

8月 校長メッセージ

「シェイクスピアとニュートン ペストをめぐって」という話をします。シェイクスピアとニュートンはともにイギリスの人で、シェイクスピアが1564年から1616年まで、ニュートンが1642年から1727年まで生きた人です。

まずシェイクスピアの話からします。シェイクスピアが俳優として、あるいは劇作家として活躍するようになったのは、1590年代の終わりごろです。当時エリザベス一世統治下のイギリスでは、演劇が盛んになり劇場も多く作られるようになっていて、その流れに乗ってシェイクスピアの劇団も有名になっていきました。実はこの1590年代から1600年代初頭には、イギリスがペストによるパンデミックで大勢の人たちが犠牲になった時期と重なっています。疫病の死者が毎週30人以上になると劇場は全て閉鎖する規定まで生まれていたといえますので、このころのイギリスでは、何回もペストが流行し、大勢の人が亡くなり、ロンドンの全ての劇場が閉鎖になることを繰り返したということです。

こうした状況は、現在のコロナのパンデミックときわめて似た状況だったのではないかと思います。このことは、ジェイムズ・シャピロ著『リア王の時代 ー1606年のシェイクスピア（白水社）』という本に詳しく書かれていますが、そんな中であっても、シェイクスピアは1604年に『オセロ』、1605年に『マクベス』、1606年に『リア王』を執筆し完成させています。ペストによる劇場封鎖にめげることなく、むしろ最も重要な傑作を生み出し、葛藤に苦しみながら生きる人間の姿を描く偉大な劇作家として後世に名を遺すようになりました。

皆さんの中に、将来イギリスに留学してシェイクスピアを研究する人がいたら、ぜひシェイクスピア劇の原文の表現の中に、どれくらいペストやパンデミックに関わる表現が含まれているかを研究してみてください。

続いてニュートンについてです。ニュートンとペストとの関わりは、ニュートンがケンブリッジ大学のトリニティ・カレッジに入学し、学位を取得したころにペストの大流行があったことです。大学が閉鎖となり、1665年から1666年にかけてニュートンは郷里に帰って研究を進め、「微分積分」、「光学」、「万有引力」を着想し、証明にいたりました。「ニュートンの三大業績」と呼ばれるこの3つの業績は、いずれもペストから逃れて故郷に戻っていた18か月の間に成し遂げられていて、ニュートンが25歳までになされたものです。シェイクスピアと同様にペストから逃れて大学から離れることによって生まれた時間が、ニュートンを人類史上最も偉大な数学者、科学者の一人にしました。

ちなみにニュートンの「リンゴの木」をさし木して育ったりんごの木が、すぐその小石川植物園にありますので、見に行ってください。御利益があるかもしれません。

ペスト菌の発見についてもお話しておきます。調べると1894年の中国・香港でペストが流行した時に、北里柴三郎によってペスト菌は発見されたとありますが、このペスト菌発見の経緯については、北里とフランス政府とパスツール研究所の要請を受けた、アレクサンドル・エルサンとどちらが発見者であったかという論争があるようですので、興味がある方

は調べてみてください。

シェイクスピアとニュートンを例に挙げて、私がお伝えしたかったのは、人間は疫病によって創造や探究を止めることはないということです。真に創造的な人物や研究者はむしろ感染拡大によって生まれた時間を使って、思索と観察から新しいことを生み出しました。今後、コロナパンデミックがどのように拡大していくか分かりませんが、皆さんはシェイクスピアとニュートンのようであって欲しいと思います。